慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東京の西アフリカ系出身者の生活戦術： 六本木におけるサービス業従事者を事例として
Sub Title	The sense of tactics' of West African workers in Roppongi
Author	川田, 薫(Kawada, Kaoru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.71- 92
JaLC DOI	
Abstract	My points of view is based on how Africans manipulate and break through the rigid Japanese system by using the sense of tactics' and reconstruct their own way of life taking their position not as an object but as a subject focused on the West Africans who have migrated or recently came to Japan and now are working in Roppongi. Under the sever circumstances in Japan, most of African workers engaged in working at the factory at the beginning. Recently some Africans are shifting to security, bar and club jobin Roppongi due to experiencing the babbleera of the Japanese economy. I conducted the field work research intensively in Roppongi to clarify their creativity in terms of soft resistance and passing in the way of manipulation of Japanese culture and power'. I approached the classification of the new comer and old comer and revealed how these types categorized workers have been through the different stages. Also, I introduced two types of their information network categorized as a street type and anorganized association type and paid attentionto theirself - help relationship among the Africans referring their traditional heritage. From my own perspective, the image of Africans in Roppongi are camouflaged to reflect that of Americans and then I found out that most Africans claim that they are Americans to protect their interest against the public and police that harass them.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東京の西アフリカ系出身者の生活戦術
——六本木におけるサービス業従事者を事例として——

'The Sense of Tactics' of West African Workers in Roppongi

川　田　　薫*
Kaoru Kawada

My points of view is based on how Africans manipulate and break through the rigid Japanese system by using 'the sense of tactics' and reconstruct their own way of life taking their position not as an object but as a subject. I focused on the West Africans who have migrated or recently came to Japan and now are working in Roppongi. Under the sever circumstances in Japan, most of African workers engaged in working at the factory at the beginning. Recently some Africans are shifting to security, bar and club job in Roppongi due to experiencing the babble era of the Japanese economy.

I conducted the fieldwork research intensively in Roppongi to clarify their creativity in terms of soft resistance and passing in the way of 'manipulation of Japanese culture and power'. I approached the classification of the newcomer and oldcomer and revealed how these types categorized workers have been through the different stages. Also, I introduced two types of their information network categorized as a street type and an organized association type and paid attention to their self-help relationship among the Africans referring their traditional heritage. From my own perspective, the image of Africans in Roppongi are camouflaged to reflect that of Americans and then I found out that most Africans claim that they are Americans to protect their interest against the public and police that harass them.

1. はじめに

1.1 本稿の目的

六本木で多くの黒人男性を見かけるようになったのはここ数年のことである。彼らの大半は，客の立場ではなく，六本木で働いている就労者であり，主にアフリカ出身者であった。日本は1980年代後半よりバブル経済の状況下でアジア地域をはじめとして多くの外国人労働者が来日しており，その受入れ先は町工場や中小企業などの製造業等で単純労働者としてであった。アフリカ出身者もこうした日本の好景気の流れでの中で，1980年後半にはガーナが先発隊として，次いで1990年前後からナイジェリアをはじめとしたアフリカから独身男性が多く来日していた［若林，1994］。

* 名古屋大学大学院文学研究科文化人類学専攻博士課程（都市人類学・都市社会学）

本国における外国人労働者の移民研究は，日系ブラジル人やアジア系の外国人労働者の社会学的調査方法による多くの研究の蓄積がなされている。一方で，アフリカ出身者に関する移民研究は，1994 年の若林チヒロの「日本人の黒人観と滞日アフリカ出身者の生活・ネットワーク」があるにすぎない［若林，1994］。若林の研究から 10 年程経過した現在，日本女性と結婚したアフリカ出身男性の家族構成にも変化があり，2 世代となる子供が誕生し，子供との会話は日本語で行っている。また日本のビジネスマナーは仕事を通じて学習し，異文化での生活への支障はほとんどない程度に日本社会への定着も進んでいる。加えて，1998 年頃からはバブル期に来日していたナイジェリア出身起業家が現れアフリカ出身者を雇用するパターンが増加している。バブル経済崩壊後は主たる就労先であった工場は不況のあおりを受け，六本木は大きな就労先へと移行しつつある。さらに 2000 年以降も新たに日本に成功の夢を託して来日するアフリカ出身者もおり，この 10 年間でアフリカ出身者の就労構造にも変化が現れている。

本稿の目的は，アフリカ出身者の中でも 2002 年時点で外国人登録者数が一番多い西アフリカのナイジェリア連邦共和国出身者を中心とし，東京都港区六本木で主にサービス業に従事する，正規就労者（就労査証あり），超過滞在中の非正規就労者（不法滞在であり就労査証なし），もしくは過去に超過滞在者であったという生活者の立場に焦点をあて，周縁におかれた彼らが日本社会でどのように自己実現を達成しようとするのかという生活の過程を彼らの日常の実践から見ていく。

本稿を松田素二の言葉から援用すれば，「アフリカの植民地化・国家形成という上からの『支配の必要』とアフリカ人が日々生きるための『生活の必要』の間の緊張したせめぎあい」を日本社会に置き換える試みである［松田，1987］。このような視点が有効になる背景として，本国の移民政策が鍵となる。本国の「出入国管理及び難民認定法」（以下「入管法」という）は，外国人の資格者以外の労働は認めていない。それらの資格にはいわゆる単純労働に従事するサービス業，家事労働等などの資格はない。つまり，日本政府は来日した外国人には単純労働として勤務することは容認していないのである。こうした日本の外国人労働者受入れ政策は，伊豫谷が指摘するように「フロント・ドア政策」として単純労働者を合法に移民として受け入れるのではなく，「バック・ドア政策」として不法形態でも外国人労働者を受入れ，さらに「サイド・ドア政策」により，外国人研修生を単純労働者として利用してきた経緯がある［伊豫谷 1994］[1]。しかしながら，バブル経済崩壊後，外国人労働者の受け皿となってきた中小企業も不況のあおりを受け外国人労働者は解雇の対象となり，日本の底辺を支えていた多くの超過滞在の単純労働者を排除政策の対象として入管法が厳しくなる。2000 年入国管理局法の改正により，超過滞在者が日本から出国した場合は，日本に再入国できるまでの期間が従前の 1 年間から 5 年間へと引き伸ばし，国民国家である本国は国益を優先し超過滞在者数の抑制を図ろうとする狙いがあった。

六本木のような盛り場は猥雑で混沌としており，非正規就労者はこのような都市の盛り場の性格を利用しカムフラージュしやすいのである。また，就労者にとって盛り場は，欲望や利害のエネルギーが渦巻く空間として，常に暴力と隣り合わせである。国家における国民の統治の観点からは，移民を監視していくことは「支配の必要」という大義名分があり，移民にとって国家は生存の権利も奪いかねない，強者側から生きていくことそのものを死守するため「生活の必要」が創出される契機となる。このような双方の利害の相違には，自ずと緊張した関係が生じるといえよう。そこで，このような緊張したせめぎあいを考察していくために，ド・セルトーの「戦術」という概念を援用していく。「戦術」とは，非-場所的な性格が故に時間に依存し，なにかうまいものがあれば「すかさず拾おう」と絶えず機会をうかがう行為であり，またその機会のとらえ方である。特に，弱者は自分の外にある力を絶えず利用し，チャ

ンスとその捉え方を臨機応変のかけひきや変幻自在な擬態により計算をめぐらすことである［ド・セルトー，1987: 26-28］[2]。

本稿では，周縁化されたアフリカ出身者が日本という堅牢な社会を受身に任せるのではなく，主体的な主人公として生活していくために好機をとらえ，日本文化を流用しながら日本社会との新たな関係性を創出していく過程を人類学的方法により描いていく[3]。本論の構成は，2章から4章は盛り場である六本木の位置づけとアフリカ出身就労者の実態を明らかにし，5章，6章は就労者の生き抜く実践活動，7章は情報ネットワーク，8章はアフリカ出身者の自己像を明らかにしていく。

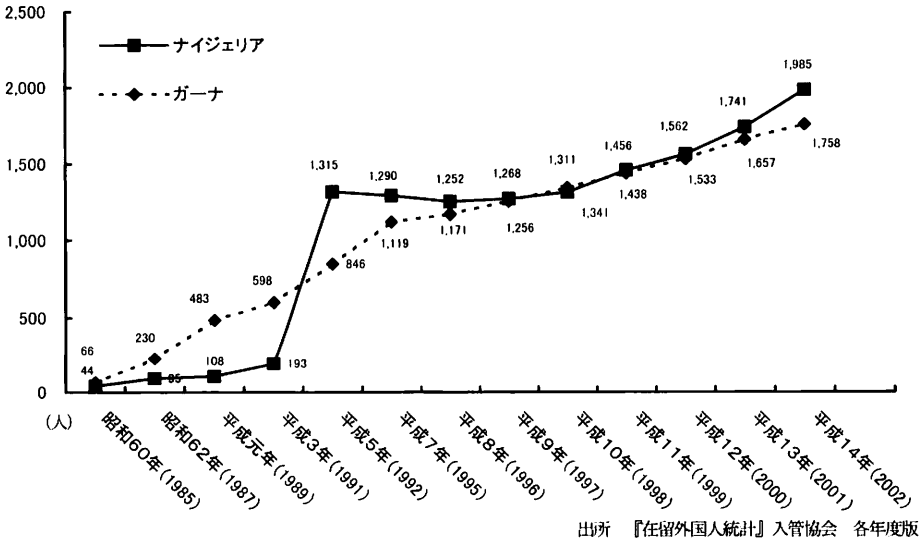
本調査は，2001年8月より2003年1月にわたり六本木のメインストリートにある某ビルの地下1階にあるナイジェリア人が経営するクラブバーMで勤務しているナイジェリア人や同ビル内の日本人経営者のストリップバーで勤務するシエラレオネ人からの聞き取りを行った。また，フィールドワークを通じて出会ったストリートで呼び込みなどを行っている不特定のアフリカ出身者などからの聞き取りも反映している。本稿では，2005年4月現在における対象者の後追い調査の結果も含めている。

2. 外国人労働者の位置づけ

2.1 西アフリカ地域の外国人労働者の推移

2002年時点，日本で生活している在留外国人数は150万人ほどであり，日本の総人口約1.2%を占めている。アフリカ諸国の外国人登録数について見ると，2002年（平成14年度）ではアフリカ諸国の登録数全体の半数が西アフリカ地域からの出身者で占められている。西アフリカ地域を見るとナイジェリア（1,985人），ガーナ（1,758人）が筆頭となり，次いでギニア（196人），セネガル（160人），マリ（83人）と続いている。

西アフリカ出身者は，1984年頃よりガーナを中心に日本へは中東経由により来日し始めている［若林，1994］。ナイジェリア人の来日は1991年頃より増加し始めるが，1992年になると急激にナイジェ



出所　『在留外国人統計』入管協会　各年度版

図2.1　ナイジェリア，ガーナの外国人登録者数の推移

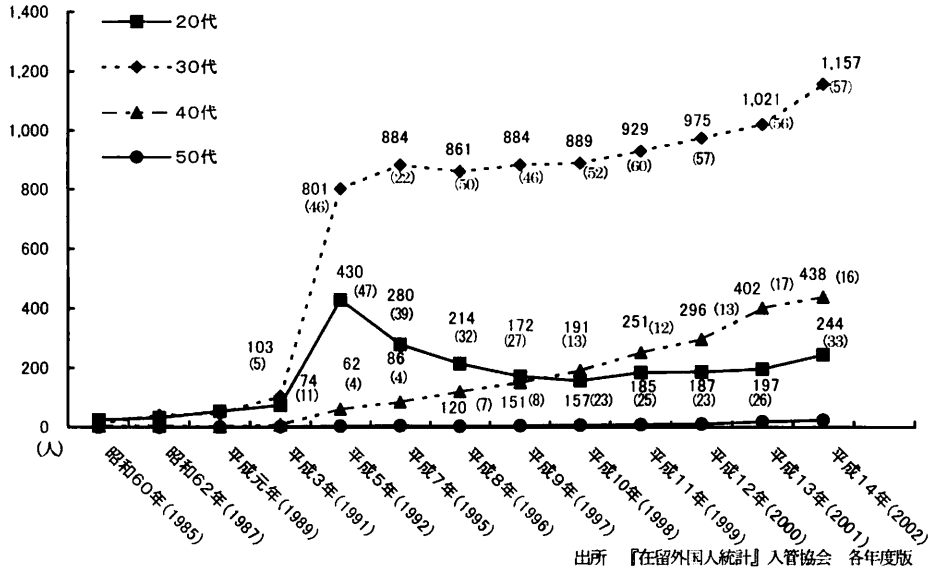


図 2.2 ナイジェリアにおける年齢別外国人登録数の推移（男女総数，( )は女性数）

リア人の登録者数が増え，ガーナの登録者数を抜くまでになる（図 2.1）。

ナイジェリアの年齢別別外国人登録の推移によると，30 代の占める割合最も多くなっている。1998 年頃からは，20 代と 40 代の人数が逆転し始めており，全体的に在留者らの加齢化そして在留長期化の傾向がある（図 2.2）。

3. 世界都市の盛り場「六本木」

3.1 盛り場としての「六本木」

東京の港区に位置する六本木は，様々な言語が飛び交う国際色あふれる「盛り場」である[4]。戦後から，赤坂，麻布などはアメリカの軍人らが集うバーやレストランなどがあり，外国人が集う街として発展していた。しかし六本木は交通の便がさほど良くないため，麻布などに居住している外国人が利用するレストランや喫茶店が多少ある程度であり，防衛庁など軍事施設の拠点として機能していた。神埼宣武によると，六本木の本格的な盛り場の始まりは，1965 年の地下鉄日比谷線の開通により集客数が増え，駅周辺を中心とした発展であった［神崎，1993: 25］。六本木は，1980 年代は横須賀基地や福生基地からの米兵の歓楽街として，現在はアメリカのみならず世界各国の外国人観光客や出張で来たビジネスマンらの観光の街として，または在住外国人や日本人で賑わいを見せる世界的にも有名な盛り場へと成長している。

アフリカ出身者からの聞き取りによると，六本木の名前は，ナイジェリア本国でも海外へ移住しようとする者の間では知られていたようであり，盛り場である新宿や渋谷とは違う顔を持つ街であると考えられていたようである。さらに六本木に 2001 年に来日したナイジェリア人は，「この街に行けばとりあえず何か情報を得られる場所である。」と語った。つまり生きていくことに直結する情報の集積場所であるという意味であろう。この街では，人々の欲望を満たすことに貢献する者は国籍や地位は問われない，そうした「開かれた」性格は，欲望の集積地にもなり，それに伴い莫大な利潤の集積地として大量な労

働力をも必要とする。

3.2 「情報の市」としての六本木

六本木は情報の集積場所として社会的に異質な人々が集まる場所であり，人数的にも空間的にも超高密度な空間を表象し，一大ビジネスマーケットである。六本木では，就労者は生活の糧を最大限に得るために，娯楽といったサービスの抽象的な売買を積極的に行う。彼らにとって重要なことは客を呼び込むことであり，ストリートでは調子の良い掛け声に引き付けられたり呼び込みに根負けするなどの方法が見事に身体化されている。就労者は，仲間同士で呼び込みの方法や客と交わされる会話からお金になる「生きた情報」を獲得しその情報をストリートにおいて日々交換する。こうして情報交換の場としてのビジネスマーケットとしての「市」の側面が浮かび，「市が物の交換という狭義の経済的機能にとどまらず，物に付随する人の集中・分散の場という社会的関係の焦点」として盛り場の「市」性をとらえることができよう［赤阪，1988: 56］。

著者は，人との出会いを通じた情報交換などの場としての六本木を「情報の市」と考えている。六本木の盛り場は，客がお酒やストリップなどの鑑賞として代金を支払い，異空間としての場をあらゆる装置により演出をすることで客にサービスを提供しており経済取引の原理が働いている。同時に，毎日開かれている六本木のバーでは，外国人や日本人客もさることながら，六本木の就労者以外のアフリカ出身者らも仲間との出会いや会話を求めて遊びに来る。このように異質な人々が集まる六本木は，人々を介しながら六本木から外へと情報が流出し，外から内へと新しい情報が流入する過程を作り出し，ビジネス的価値が付与された新たな情報が「情報の市」を通して，お金を生み出す集積地となっていくのである。

4. 六本木で就労する西アフリカ出身者

六本木の就労者の出身国は，ナイジェリア人とガーナ人が多く，少数であるがセネガル人やマリ人，シエラレオネ人そしてチャド人などがいる。本稿では在留数が最も多いナイジェリアを中心とした就労者について見ていく。ナイジェリアでは，一般的に 250〜350 ものエスニックグループがあるとされている。なかでも 3 大エスニックグループは，北部のハウサ (Hausa)，東部のイボ (Igbo)，西部のヨルバ (Yoruba) である。滞日ナイジェリア人の出身民族は，公的な記録としては存在していないが，聞き取りからイボ人，少数派の民族であるエド人 (Edo) が多く，その次にヨルバ人が続く[5]。なかには，カラバ人 (Carabar) などの少数派の民族出身者もいるのでひとくくりに民族の類型化は難しい。公用語は英語であるが，母語以外にもイボ語，ヨルバ語，エド語，ハウサ語の挨拶程度なら多くの者が話すことができる。宗教は，北部のハウサはイスラム教が多く，南部のイボ，ヨルバ，エドはキリスト教が多い。いずれも土着宗教との融合形態が見られる[6]。

4.1 インタビューした六本木の就労者

・B 氏（ナイジェリア：男性 30 代，イボ）

2001 年 10 月来日。バー M にてセキュリティ及びドアマンの勤務である。ナイジェリアの大学卒で，外資系会社での現地人と本国の社員の賃金格差に疑問を覚え，日本でビジネスチャンスを求めて単独で来日した。親族や兄弟の多くはアメリカ，イギリス，ドイツなどに移住しており，常に西欧諸国との賃金や就労環境の情報を得ている。日本語はあいさつ程度が可能であり，現在は日本人と結婚している。

・F 氏（ナイジェリア：男性 40 代前半，イボ）

2001 年 10 月来日。ストリップバーに勤務し，六本木交差点の路上でビラ配り及び呼び込みに従事する。大学卒であり本国では公務員 (Civil Servant) であったが，日本で行われたビジネス会議を利用して来日し，B 氏とともに東京で約半年共同生活をしていた。母国に妻子がおり，2003 年 4 月に本国に帰国している。日本語はほとんど分からない。

・S 氏（ナイジェリア：男性 30 代，エド）

2001 年 1 月頃に来日。バー M に勤務しドアマン及びバーテンダーの勤務である。高卒でありナイジェリアでは自動車整備工であった。兄が既に日本に滞在しており，呼び寄せにより来日している。二人の兄がおり両方とも日本滞在年数 10 年以上である。内一人は某大使館勤務，別の一人はレストランのマネージャーとして勤務している。住居なども兄が全て手配するなど生活面でのバックアップが整っている。日本語はあいさつ程度であり，現在は日本人と結婚している。

・P 氏（シエラレオネ：男性 30 代，フルベ）

1995 年に来日。来日時は，西アフリカのリベリアの北に隣接するシエラレオネ共和国からの大学生であり，在籍中に民主化運動の活動に関わり反政府による迫害から逃れるために来日した。来日当初は，遠戚の紹介により印刷工場で勤務をしたが入管の規制が厳しくなり解雇される。その後，工事現場の仕事や友人の店の手伝いを経て 1999 年から六本木で働き，現在はバー M の同ビルのストリップバーで勤務している。日本語は大変流暢であり，日本人と結婚し子供がいる。

・C 氏（ナイジェリア：男性 30 代，イボ）

日本には日本語学校の入学のため 1992 年に来日しており，日本の大学に入学するが内容に満足いかず中退する。金融関係の会社から飲食店の勤務を経て，オフィス街でお弁当の路上販売として商売を始める。その後六本木のメインストリートにて軽バンで食べ物を販売する露天商をしていたが，2002 年 12 月より六本木の雑居ビルにダイニングバーを開店し，車での販売を辞めた。六本木での路上販売は，知人であるバー M のオーナーから店前での販売の誘いを受けて 1999 年から始めた。日本語は流暢であり，日本人と結婚し子供がいる。

・K 氏（ナイジェリア：男性 30 代，エド）

バー M の同系列店であるバー J に数年前からドアマン及びセキュリティとして勤務している。ナイジェリアでは，高校卒業後ストリートボーイ（通称エリアボーイ）としてぶらぶらと過ごしていたと言う。日本人女性とナイジェリアで結婚し，1994 年に来日し六本木以前は工場勤務であった。兄は 1989 年に来日している。ナイジェリアの主な民族語，ハウサ，ヨルバ，イボ語なども巧みに操れる。日本語は，流暢であり，日本人と結婚し子供がいる。

4.2 就労者の勤務形態

聞き取り対象者は，同族の縁者の有無やネットワークの違い等により六本木での就労に至る経緯や待遇にも違いが生じている。主に，新来者として来日して 1～3 年以内の者と古参者として来日 4 年以上経過している者と区別しながら 4 つの類型に分けて就労の実状を明らかにしていく。

パターン I　新来者であり，日本に兄弟・知人がいない者。

パターン II　新来者であり，日本に兄弟が既に在留している者。

パターン III　古参者であり，日本に兄弟や知人が既に在留している者。

パターン IV　古参者であり，日本に兄弟・知人がいない者。

1. 就労場所及び就労時間

①六本木での就労者の勤務先

クラブ，ショットバー，ラウンジバー，ダイニングバー，そしてストリップバーなどのサービス業での接客業が主となっている。

②仕事内容

バー店内でのバーテンダー，店先でのドアマンとセキュリティを兼ねた呼び込み，路上でのビラ配り兼客引きなどが主な仕事であり，客とのコミュニケーション能力が要求される仕事である。

③就労時間

各々のバーにより異なるが，ほとんどが午後7時までに開店する。終了時刻は，ストリップバーの店内勤務者は午前5時から6時頃まで，ストリップバーの路上でのビラ配りは午前3時頃までである。ナイジェリア人オーナーのクラブバーMの就労者は，平日は午前6時頃に閉店し，週末は客が帰るまで営業するため翌日の正午に閉店となる。

2. 雇用待遇

就労者は，アルバイトと正社員の形態がある。調査対象者は，アルバイトといってもフルタイム就労者として正社員と同等の拘束時間が課せられる。

パターンIの新来者

バーMで勤務している超過滞在者B氏は，新人アルバイターであり月給は15万円ほどである。勤務時間は1日12時間以上で週5〜6日勤務と大変過酷であり，賃金は東京都の最低賃金ぎりぎりである。低賃金となる理由には日本人ブローカーと1年間の雇用契約を結んでいるため，給与のピンはねが行われているという現実がある。

パターンIIの新来者

バーMで兄弟の紹介で勤務している超過滞在のアルバイターS氏は，ブローカーらなどの介入を経ない分，上記パターンIのB氏と同様の仕事で給与額は20万円程度の賃金を得ている。

パターンIIIの古参者

バーM系列で就労ビザを持っているK氏は，正社員として雇用されており，30〜50万円程度の給与にボーナスなど福利厚生も整備されている。長期休暇の取得も可能である。基本は週6日勤務である。

パターンIVの古参者

日本人オーナーのストリップバーで就労ビザを持つアルバイターP氏は，路上で客の呼び込み及び店内の会計をしており基本給に歩合制が加わり30万円ほどの賃金を得ている。週6日，午後6時から翌朝午前5時まで勤務し，日曜日のみ店の定休日となる。

3. 六本木での職探し

新来者及び古参者からの聞き取りの結果以下のような方法により仕事を得ていることが分かった。

パターンIの新来者

- B氏は来日直後から自ら六本木に出向き仕事を得ている。しかし，何ら知識も持たない新来者のため日本人ブローカーなどに引っ掛かるなどし，賃金の中間搾取の経験をしている。六本木以外でのコネクションがないため，六本木での勤務しか選択がない。
- F氏は来日して3か月ほど経過してもなかなか定職が見つからなかったが，六本木に頻繁に通い口コミを通じてストリップバーでの呼び込みの仕事に就くことができたが，兄弟の仲介がないため，警察

との接触が最も多く危険が伴う仕事にしかつけない。

パターン II の新来者

S 氏は在留している兄弟の助けにより知り合いのバー M での職を紹介されている。比較的警察の監視を受けないクラブなどのバー勤務となり，ブローカーなどの被害を未然に防ぐことができる。

パターン III の古参者

元露天商だった C 氏は，ビジネスマン相手の弁当売りでの利益はいまひとつであったところに，バー M のオーナーから六本木の方が商売は儲かるとの誘いを受けバー M 店の前で飲食販売の露店を始めた。露天商の時は，収入も大変良かったが，警察の取り締まりがうるさかったので，現在は，雑居ビルで店を構えて商売を始めるようになっている。

パターン III の古参者

K 氏はバー M と同じオーナーの経営するバーで 1998 年より，バー M のオーナーの誘いを受け工場労働者から転職し，このバーでの古参メンバーとして責任あるポジションについている。仕事は店前での呼び込み及びセキュリティであるが，古参者なのでオーナーの信頼も厚く，自身の裁量により店内で休憩したり仲間と路上で談笑したりすることができる。

パターン IV の古参者

P 氏は，工場労働者の経験を過去に持ちながらも，同国の友人達が日本から出国したことでコネクションを得ることができず 3 年間ほど日雇いや知人の店で短期の手伝いを経て，1999 年から同国者の口利きにより六本木で仕事に就くことができた。2000 年からアルバイトとしてストリップバーで勤務し，路上でのビラ配り及び店内業務に就いている。

新来者はビザの問題を抱えている者も多いため，就職口を見つける方法としては同国者の仲介による方法が一般的であり，ハローワークやフリーペーパー等の求人誌による正規ルートの就職は大変難しい。そのため，新来者において同国人が多くいる六本木は手っ取り早い就労先となる。

新来者と古参者の双方が，より良い環境で安定した生活を営むためには，同国人とのネットワークや日本人の支援者もおのずと重要となる。K 氏や C 氏，S 氏などは，兄が既に日本に在留しており日本で安心した生活ができるように，日本語学校の手続き，就職先，住居など全面的なバックアップが整備されている。そのため，K 氏や C 氏は超過滞在となることは一度もなかった。

4.3 六本木で就労する古参者の経緯

古参者が六本木で就労し始める経緯は，低賃金の工場勤務からの転職，不況により工場からの解雇または様々なアルバイトを経験し，その後仕事がなくなり六本木へとやってくるなどがあげられる。一旦，六本木で働きはじめると，引き続いて六本木に留まることが多くなる。その理由として六本木では，日本語が流暢でかつ就労可能なビザがある外国人就労者は給与も高くなる傾向が挙げられる。そこで 3 人のケースをみていき，六本木で就労していく経緯を見ていく。

ケース① 日中の仕事に復職ができない P 氏:

オーバーステイで工場勤務をしていたが入管の取り締まりにより解雇され，3 年間定職から離れており，六本木で同国者の紹介によりバーでアルバイトの職を得る。その後ストリップバーでのアルバイト勤務に転職する。ストリップバーという職種のため，日々不衛生な環境に身をおいていることにストレスを抱えている。夜の仕事を辞めたい気持ちが大変強いが，日中の仕事が見つからず現在も六本木で勤務している。

ケース② 高額な賃金を求めてバーMの元マネージャー，ナイジェリア人40代前半：

元工場労働者であったが，2002年に正社員としてバーMの社長に日本語能力を評価されマネージャーとして雇われる。バーの給与は40万円ほどである。就労環境は，週1日程度の休みしか取れず，バーで寝泊りすることも多いが，日本人妻と子供が3人おり家族を養うために六本木での仕事を選択した。

ケース③ バーMのオーナーから声をかけられて工場勤務からの転職したK氏：

K氏はバーMと同じオーナーが経営する系列のバーで1998年から勤務し，このバーでの古参メンバーである。古参者のためオーナーの信頼も厚く，自身の裁量により店内で休憩したり移動したりすることができる。正社員で給与も30〜50万円ほど得ており，長い休暇をもらってドイツやオランダ旅行するなど待遇は大変良い。

六本木への就労経緯は，1つめにナイジェリア人就労者に関しては，ナイジェリア人経営者とのつながりが大きいことが分かる。2つめは，古参者の参入経緯の理由として給与が高いことが挙げられ，工場勤務が時給850円程度と比べると格段に条件は良い。しかし，六本木の就労者の多くがナイジェリア人とガーナ人という2大勢力がある環境で，古参者P氏のようなシエラレオネ出身で同国者の友人は既に母国やアメリカに戻り，国内で同国者達との情報ネットワークにアクセスできない者は，ストリップバーのようなリスクが大きく，不健全な環境に身を置くことになる。P氏は自ら職を求めて聞きにまわっても断られ六本木で働きつづけるしかないと諦めるようになったという言葉から，少数派のアフリカ出身者は，さらに周縁化され易い立場にいることが分かる。

そこで次節では，六本木に多くのナイジェリア人就労者が流入する要因の1つであるナイジェリア人経営者と就労者の属性について見ていく。

4.4 ナイジェリア人経営者の現われ

六本木では，90年代後半より古参者を中心としたアフリカ出身者のバー経営者が増え始め，ナイジェリア人やガーナ人オーナーが中心となっている。また，六本木以外でも，自営業で電化製品をコンテナに詰めて本国に輸出するコンテナビジネスに従事しているナイジェリア人達も成功をおさめ株式会社になるまでに成長している。ナイジェリア人経営者は，多角的にビジネス展開をする傾向があり，飲食業ではアフリカンレストラン，クラブ，ラウンジバーやショットバー等の同業種内で拡大していくタイプやコンテナビジネスの他にクラブ経営の異業種が混合するタイプがある。ナイジェリア人のビジネスの展開方法には共通性があり，最初のビジネスが成功するとそれに満足することなく，同業種か異業種を問わず，経営者の持っているネットワークを駆使し事業の拡大を積極的に行う。以下に，ナイジェリア人経営者と就労者の関係を事例として挙げていく。

事例①

バーMのナイジェリア人オーナー（エド人）は，1980年代後半のバブル期に来日している。1998年にバーMをオープンさせ，大きな成功をおさめ事業を拡大していく。このバーMを皮切りに，六本木にバー3店舗，神谷町にバー1店舗，渋谷にクラブ1店舗，恵比寿にアフリカレストランを経営している。株式会社として上場しており，六本木に小さな事務所があり経理全般は社員と妻が行っている。

バーMの従業員は，2003年当時，アフリカ出身者は，全員ナイジェリア人男性でイボ人とエド人が占めている。また，日本人スタッフの他に外国人従業員は，フィリピン人，アメリカ人，ニュージランド人が店内スタッフとして勤務している。同系列のバー勤務のK氏はナイジェリア出身のエド人で，他

店舗にもアフリカ出身者が勤務しており，その多くがナイジェリア人スタッフである。

事例②

C 氏（イボ人）は，日本の大学中退後，一般企業，飲食業での勤務を経て，フランスに料理の修行のため渡仏している。帰国後オフィス街での弁当販売を経て，バー M のオーナーの誘いにより 2002 年まで自家用車を改造してローストチキンを路上で販売していた。家族経営で妻がその仕込みや経理全般などを手伝っていた。2003 年からは，六本木の雑居ビルに店を構えダイニングバーを開店させている。またイベントがあると自家用車でロースとチキンの出張販売を行っている。

C 氏のダイニングバーは，C 氏の弟を母国から呼び寄せ，日中は語学学校に通わせ，夜はバーで勤務している。他にナイジェリア人男性スタッフ 1 名，インド人男性スタッフ 1 名である。

このようにナイジェリア人の従業員の属性は，アフリカ出身者でも同国者が採用される傾向があり，民族間では，エド人とイボ人との親和性が高い。イボ人の就労者は，イボとエドは文化的に近いのであまり違和感がないと語っている。バー M オーナーが経営する店舗に関しては，同国出身で，エド人あるいはイボ人を選好する傾向がある。しかし，経営者達は，民族間の関係を公にすることは消極的である。そのため同民族に特化して雇用している意図はないと答えるが，最終的には同国出身で，同民族が残っていくのが現状と結論づけている。ナイジェリアに事務所をもち日本に年 4 回ビジネスでやってくるイボ人のビジネスマンは，「ヨルバ人もハウサ人も雇ったけれど，結局今働いているのはイボ人だね。当然忠誠心もあるし」と日本滞在時に語っている。ナイジェリアにおける民族関係は，本国においても私的な場では議論されても，公の場では自民族優位主義とも受け取られかねない言動は慎まれる。

成功者としてのロールモデルであるバー M のオーナーは，六本木ではアフリカ出身の経営者として一番成功している人物として，ナイジェリア出身者の憧れである。高級住宅街に住み，高級車に乗り，成功を享受しているが，一方で仕事は一生懸命し，時には車の中で仮眠をとるほど身を粉にして働くオーナーの姿は，就労者に希望と自信を与える存在となっている。経営が安定している C 氏は将来日本で生活したいかとの著者の質問には「*日本人労働者はみんな働きすぎ，このまま日本にいたら私も同じように早くに死んでしまうよ。西欧かナイジェリアに将来は住みたいね*」ともらしていた。バー M のオーナーや C 氏も，長期の休暇をとり，アメリカやドイツなど各地の親戚や友人を訪れている。また，こうした経営者らは，既にナイジェリア本国にも，自宅を購入し，中には豪邸にプール付の物件もあり，ナイジェリア人就労者においては，ジャパニーズドリームとして，若いときに身を粉にして一生懸命働くことが成功につながるとの倫理観が育まれている。

次章では，夢を抱く就労者の実践活動を具体的な事例をもとに見ていく。

5. 六本木を舞台とした「生き抜き戦術」

アフリカ出身者が来日した経緯として，独立してビジネスをしたいという者やお金を貯めて本国に戻りビジネスを始めたいといった目的で来る者が大変多い。独立するには，金銭的にかなりの資金の準備が必要となる。そのためには，六本木で知り合いを作り，人脈を広げてより良い労働条件の就労先を得ることがすべての早道となる。

そこで以下では，六本木で勤務するアフリカ出身者がこうした異文化との摩擦をいかにして我が手中に収め，生き抜くために好機をとらえようとするそのとらえ方を見ていく。

5.1 六本木での日本人客への接し方

六本木で就労しているアフリカ出身者は，日本という全く異なる文化で生活していかねばならない。何が何でも生きていかねばならないといった緊張感やプレッシャーは，まず異文化との対処方法として，全く無視するのか，とりあえず真似してみよう，または周りの様子を見てみようなどの選択を迫る。六本木の新来の就労者においては，この第1ステップは経済的基盤のための対処として，仕事場までの交通機関をマスターし，バーでの仕事を覚え，日本人客の扱い方，そして「権力」との関係等を把握していくことが生活戦術として重要となる。また，古参者においても，固定客を増やしたり，新しい客を多く呼び込むことが給料のアップにつながるため，自身の個性を日本人好みに調整したりすることも戦術として大切となる。そこで，六本木での就労者の日本人客を通した異文化への自己表出を見ていく。

1. 日本人客とのコミュニケーション方法

①新人従業員の応対

バーMで勤務していた当時新人のB氏は最初の4か月ほどは先輩のS氏とともに客の呼び込みの仕事をしていた。B氏は，こうした仕事は全く初めてであったため，S氏の振る舞いを真似たりしながら，お客の勧誘の仕方を学んでいる。B氏は，日本人客が自分に向かって言う日本語の意味が分からない段階のため，想像を駆使しながらなんとなくその場の雰囲気を読み「ハ・ハ・ハ」と笑ったり，「*アハハハ*」などといったNon-Verbalな態度により折り合いをつけている。B氏は，従業員内で使用される日本語で「*おはようございます*—」，「*おねがいします*—」，「*バイバイ*—」や「*そうだよう*」などの日本語に語尾を延ばした言いまわしなどを気に入っており，日本人客とのコミュニケーションで使用し，従業員同士で遊び半分でも使用されている。

②古参従業員の上級者の応対

六本木に勤務して4年目を迎えるP氏は，既に日本での生活は慣れていて，日本語も大変流暢である。P氏は，相手が日本人で英語を話すことができても決して英語を使うことはない。P氏は，路上でビラ配りの仕事もしているが，知り合いの日本人女性らが通りかかると，一緒にビラを配っていたセネガル出身の従業員が女性たちに近づいてくるとすかさずP氏は，「*彼に気をつけないとだめだよ。だって女の子大好きだからね*。」などと，冗談を言いながら女性たちを笑わせてリラックスさせる会話術を身に付けている。

2. 日本人客の勧誘

六本木での日本人客に対する使用言語は，日本語が十分出来ない新参者の場合は，簡単な英語の使用となる。しかし時折，日本語で「*げんき*」，「*じゃあね*」，「*またきて*」，「*どうぞ*」程度のサービス業での円滑なコミュニケーションに必要な日本語を使用する。

特に，日本人客を勧誘する場面では，使用言語にも様々な組み合わせ方がある。店先で路上を歩いている客に飲み物の割引チケットを配るタイプは，ほとんど言葉を使用しなくてもなんとか務まる。しかし，ストリップバーや奥まった道路にあるバー呼び込み従業員は，六本木交差点や幹線道路で呼び込みを行うこととなる。勧誘は，「*What's your name?*」，「*Where are you going?*」などすべて英語を使用し，共に歩きながら何とか引きとめようとする勧誘のパターン，または「*安いよ*」，「*大丈夫，大丈夫*」，「*見るだけ*」などの簡単な日本語で安心させて英語により「*COME ON!!*」と呼びかけ安心させたところを半ば強引に勧誘するパターン，時には歩いている女性客に対して強引に足止めさせて囲い込んで説得するパターンなど，客の属性やリアクションに応じて呼び込み従業員は短時間のうちに関心または安心感を

与えるような言語や Non-Verbal なアプローチを採用することで説得していく。

3.　節度を越えた日本人客の対応

日本人客の中には我を忘れるほど飲んだ酔っ払いが店員にからむこともしばしば起こる。特に，セキュリティとして勤務している大柄の黒人などは，気が大きくなった酔っ払いから喧嘩を吹っかけられる対象となる。バーのボス的存在であるセキュリティのＫ氏などは，日本語が流暢であり，日本人男性がつっかかってきた場合でも，日本人が日本語を話せる外国人に安心感を覚えることを良く理解している。そのため，喧嘩沙汰になる前に事を収めるだけの話術を持っており頼りになる存在である。一方で，日本語が片言のＢ氏などは，日本人客がつっかかってきた場合は，外国人客よりも扱いが難しいと言う。日本人客に対してへりくだった態度で「*すみません*」や「*ごめんなさい*」といった言葉で緊張を回避する方法は有効ではない。逆に，へりくだることで客からの暴力がエスカレートすることとなる。そのため，中途半端な日本語で緊張状態を回避するよりも，客を押しだすや簡単な英語で厳しく注意し，Non-Verbal な回避が有効と考えている。しかし，強固な態度を示しても客から「*なんだバカヤロウ*」や「*おまえなんだよ*」などの威嚇的態度が収まらない場合は，日本語が流暢なバーＭのマネージャーやＫ氏に応援を頼む。このような客との緊張関係をうまく対処できないと，客が一方的に警察に電話をし，警察沙汰へと発展することも起こる。

5.2　公的な権力に対する戦術

アフリカ出身者の就労環境は，盛り場という性格上酔っぱらった客同士のトラブルは日常的な出来事であり，さらに路上では男女間を巡った喧嘩など常に暴力と隣り合わせである。そのためトラブルを大きくさせないためにも警察との関わりが常につきまとう。さらに，日本人客の対処も適切に行わないと，喧嘩に巻き込まれたり警察沙汰に発展する可能性もある。そのため六本木における就労者は知恵を用いながら警察をはじめとした「権力」の介入から身を守っていく術が必要となる。

1.　警察による介入からの回避

警察の巡回はかなり頻繁に行われ，お互い顔見知りになっていることが多い。しかしながら，警察が権力の存在であることを忘れてしまうと，就労者は交番に連れて行かれ質問攻めにされ，逮捕される危険を犯すこととなる。六本木の就労者もこうした警察関連の話題には大変敏感であり，常に新たな情報が駆け巡っている。

そこで，以下では警察の介入の種類別に，就労者の対応を見ていくこととする。

①　定期的な秩序維持の為の巡回

毎晩，深夜以前までに警察官が歩きながらの巡回が行われている。この時に，警察官より一言二言声を掛けられたりなどのやり取りがあるようだが，Ｂ氏などは，簡単な会釈をして自分は危険ではないことをアピールするが，それ以上質問などされる状況では「*I don't know.*」を一点張りに主張することで，警察との関わりを最低限に押さえる知恵を使っている。

Ｐ氏などは，日本滞在が５年以上経っており流暢な東京弁の日本語を話すので，警察官の巡回では，逆に「*先輩，そんなことないですよ*」といったような言い回しにより緊張感を解いていく。巡回の警察官とのやりとりは，ある程度，微笑む，礼儀正しくするなどの回避の仕方が定式化しているようで，決してこちらから多くを語ることはしない。

一方で，路上で露店業を営むＣ氏などは，警察から違法営業として何度も忠告を受けるなどの経験をしており，営業時間を巡回が終わった深夜から始めるなど工夫しながら仕事を続けていた。Ｃ氏は営業

時間などの工夫を図りながら店を切り盛りしていたが，警察に路上での違法営業のために捕まるという事件があって以来営業が思うようにいかなくなり，2002年の年末からは雑居ビルに店舗を借りて新たにダイニングバーとして営業を始めるようになった。しかしながら，C氏が警察に捕まった時にも反対側で同種の露店業をしていた日本人は捕まることはなく営業を続行しており，こうした事実にC氏が非常に憤慨していたことを友人のナイジェリア人が語っている。

② 非正規就労者の取り締まり強化の巡回

日常的な巡回においてのみでなく，特定の月に多くの警察官もしくは入管による一斉の非正規就労者の取り締まりをする強化月間もある。こうした突発的な警察や入管らの取り締まりは，バーからバーへと瞬時に伝わるが，超過滞在の就労者はなす術がない。特に，路上のストリップバーをしているビラ配りの従業員は逮捕される確率が最も高くなるため，六本木交差点付近に多くいる従業員らは路上から姿を消している。バーなどでは，オーナーやマネージャーなど日本語が話せる者が警察の応対窓口となり，警察官らが退去する深夜までは就労するビザがない者は仕事をいったん休むこととなる。

③ 事件・事故による出動

また，六本木で働いている限り，バー店内での酔っ払い同士による喧嘩，物が盗まれることなどが日常茶飯事に起こり，そのつど警察との対応に追われることがある。現場に居合わせた不法就労者も状況説明を求められたりすることもあり，自分の身元を問い詰められずにうまく交わすことが求められる。B氏は，「*わたしはわからない*」と日本語で言い放ちマネージャーやボスなどに説明を求めるように促すようだ。実際には，警察官には英語をほとんど話すものがいないため，この一言で警察も諦めて自分から立ち去っていくので物事は深刻にはならないと言う。しかしながら，事件や事故が多く起こる時間帯は，早朝にかけてだと言う。深夜までは警察官の人数も多くいるが客もさほど酔っていないため，警察の介入は必要ない。しかし，早朝では警察官の人数が少ないので事件が起きても瞬時に駆けつけるケースはほとんどなく，事が終わってから現れることとなる。けが人が出るなど刑事事件に発展するような場合には，有力な証人が必要となるが，証人として協力できる意思がない者やそうした地位でない者は，「*しりません*」や「*みていない*」などといった態度を取り，面倒なことには決して関わらない。

④ 私服警官による風俗店の取り締まり

六本木では，私服警官による取り締まりも，就労者において大きな脅威の存在となる。路上でもストリップバーへの客引きなどをしている非正規就労者は，万が一，調子よく私服警察官を店内に呼び込んだ場合には不法就労者は現行犯逮捕となる危険もあり，ほとんどの場合は強制送還の道をたどることとなる。こうした情報は，就労者間で共有されており，ストリートで呼び込みやビラ配りをしている従業員は，手当たり次第に日本人客を呼び込むことは決してしないと言う。客から発せられるやりとりの言葉の中に，怪しい内容を感じ取れば，即座に頑なな態度を示してこの場を去ってもらうようにしむけるようである。

以上のように警察の監視活動は，4タイプあることが分かった。このようにほぼ毎日警察と接触を余儀なくされる就労者は対応に際して，はぐらかしやおどけといった一種の緩やかな抵抗の態度によって緊張を回避させる戦術を会得していく。一方，盛り場はハレの空間として人々が日常のエネルギーを発散し，時には酔った客が節度を越え暴走し，殺傷沙汰に発展するような大きなエネルギーが渦巻いている。こうした盛り場では，警察がストリートの平和や秩序を担う権限を公的に行使できるが，実際は巡回時かパトカーでの不定期な巡回の以外はほとんど警察が顔をみせることはない。六本木のアフリカ系

就労者は警察が自分達を守ってくれるとは信じてはいない。警察は就労者の敵にもなる存在であり，暴力団に関することにもほとんど介入しないので，強者と対置する弱者であるバーのオーナーや就労者が自警的役割を務めトラブルを調停する能力を要求される。こうした結果，盛り場の秩序は，公権力よりも就労者の私的な努力により保たれる。このようにして国家と周縁におかれた就労者との緊張したせめぎあいは，生き抜く必要に迫られている就労者が主体的に自警的役割を創出していき，強者側の警察に対する行動や言動は双方の瞬時の駆け引きを生じさせるので，この瞬時という時間軸上に起こる突発性を対処していくのに，戦術のような時間に依存した，臨機応変で変幻自在な擬態が洗練されるのである。

次節では，就労者が異文化を拝借し，手中に収めていく実践活動の源泉となる情報ネットワークについて見ていく。

6. アフリカ出身者における情報ネットワーク

就労者が情報を構築していくパターンとして，**ストリート型**と**グループ所属型**の２パターンの情報ネットワークとして類型化を試みた。

1. ストリート型ネットワーク

六本木で勤務している者は，路上勤務者はもとより店内勤務の者も店が暇になると路上に現れ，他店の顔なじみや客などとちょっとした会話を頻繁にしている。

聞き取りから判断する限りでは六本木のストリートでは，アフリカ出身者同士やもしくは国どとの就労者による組織的な援助グループは存在していないようだが，ストリートでも顔なじみが各々アドバイスをしたり，不満などを話し合ったり，またはちょっとした生活上で分からないことなどの情報交換を行うなどしている。ここでは，「ストリート仲間」といった概念で，こうした情報を共有する許容範囲を表すことにしよう。

これは顔を合わせればちょっとした会話をする程度のインフォーマルなネットワークとして，六本木の就労者同士での共通話題を語り合うという比較的内輪的なものである。ナイジェリア人同士では，六本木のストリートではイボ人，エド人，ヨルバ人間の仲間の交流は，民族間のバウンダリーを越えての交流となっているが，それ以上深くコミットする関係は個人同士の相性によることとなる。六本木のストリートでの内輪的な情報であっても外部の人間との接触により常に開かれているため，情報は，日本の仲間を超えて世界各国の仲間や親族へと共有される広がりを持っている。

① ストリート仲間になる

こうしたストリート仲間となるには，新来対象者の状況から約１年ほどはかかると思われる。例えばＢ氏の事例では，ストリートを歩くと同業のアフリカ出身者より「シャチョウ」との呼び声がかかるようになったのは，勤務して１年ほど経過してからのことであった。彼らはニコニコ，ニヤニヤしながら使う「*シャチョウ*」は，一目置きたい気持ちはあるが，でもどこか皮肉っぽさが残る，しかし馬鹿にするのでもない親しみを込めた挨拶である。Ｂ氏が六本木で勤務し始めていた２か月目では，同じバーＭのＳ氏や同ビルのストリップバーで就労しているセネガル人はＢ氏の自称（イボ人のニックネーム）と，通称（アメリカ名のニックネーム）の呼び名の区別がついておらず，「*それは誰？*」，「*あ―，新しく来たやつだよ*」という態度であったことをからも，六本木で顔なじみになることは時間を要することが分かる。

しかしながら，いったん顔なじみとして認知されると，情報のネットワークの幅は格段に広がる。例

えば，六本木以外の求職の情報，サイドビジネスなどの小遣い稼ぎの方法，そして六本木での求人情報など日本での生きていく知恵が，仲間から惜しみなく入ってくる。また，携帯電話やE-メールなどの通信手段も新しいネットワークのあり方として，毎日顔を合わせなくとも，仲間関係を再確認できる環境を維持している限り，情報のネットワークに出入りができる。

② ストリート仲間の使用言語

バーMに勤務するS氏（エド）とB氏（イボ）同士では，通称ピジンイングリッシュでの会話である。しかし，六本木でのイボ人同士での会話では，イボ語の使用に至るまでに段階がある。例えば，当人から見て相手の苗字からイボ出身であると分かっていても初対面の場合には，ピジンイングリッシュによる「ハウノウ？」や「ハウファー？」といった挨拶で始まる。しかし，イボ出身者と何回か面識を持つと個人間ではイボ語が共通言語に変わる。また，その場に他国出身者がいればおのずと英語が共通言語になることは言うまでもない。

バーMと同ビルで勤務しているセネガル出身者はフランス語が公用語で，同ビルで就労しているアフリカ出身者の多くがナイジェリア人で英語を公用語としている。セネガル出身者は英語よりも日本語の方が上手なので，仲間は簡単な英語でコミュニケーションをとる。

③ ストリート情報の種類

i. 生活全般に結びついた情報

超過滞在者の最も大きな関心事はビザである。こうした情報も逐次，ストリート仲間を通じてどのようにすれば合法的に日本で滞在できるのか，また既にビザを取得した者や，同時期に申請をした者などから，何が一番早く取得できる方法であるかといった情報を収集する。また，日本で生活していくための簡単な法律やメディアが報道している政策などの動向についての情報から始まり，警察の動向の把握として，どこのバーで誰が逮捕されたなどといった情報が飛び交っている。

ii. 仕事の不満などの緩衝的役割

六本木で勤務することは大変過酷であると不満の声をよく聞く。バーMなどに勤務している就労者らはストリート仲間を越えて個人的に職場の問題や悩みを話し合うことで，互いの不満や悩みを和らげていく。悩みの種類は，職場の不満が一番であるが，職場での速やかな客への応対をするためのアドバイス，従業員の怠慢や態度などの指摘など，職場に関する情報のやり取りである。

六本木の就労者は従業員同士を越えて路上でもこうした問題点を顔なじみのアフリカ出身就労者とあいさつの延長状として気軽に話したりしている。

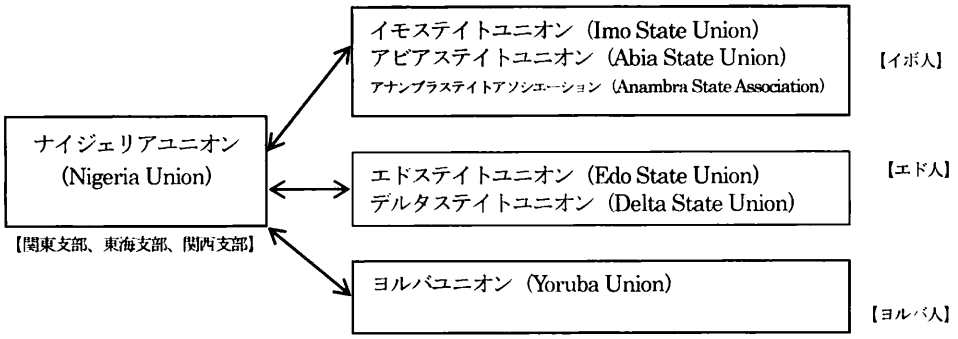
2. グループ所属型ネットワーク

著者の聞き取りでは，在住ナイジェリア人は2タイプの団体活動がある。ストリートでの情報源とは別のフォーマルな形態による情報交換として区別ができる。

① アソシエーショングループ：同郷人団体

本国には，在住ナイジェリア人のための任意団体があり，ナイジェリアユニオンを上位団体とし，行政単位の州を中心とした下位団体が組織されている。ナイジェリアユニオンはナイジェリア大使館と連動しており国家レベルの情報は下位団体へと伝達され，下位団体からは日本国に対する要望やナイジェリア大使館への要望が寄せられる。

【同郷人団体組織図】



出所　在住ナイジェリア人からの聞き取りをもとに著者が作成

ナイジェリアユニオンは，大使館に居住届を出すと自動的に会員となる。会合は，月 1 回，市民会館等で行い，任意の出席である。州レベルの団体は，各州出身者が会員となる。会合を月 1 回市民会館等で行い，参加者からは月 1 千円の会費を徴収する。議論の内容は，在住同郷人の結婚式や葬式，病気等の支援について対応を考え，母州からの要望に応えるための寄付金を集めている。会費や寄付金の一部は緊急にお金を必要としている在住同郷人に充てられる。

② プレジャーグループ：「NAS インターナショナル」

ノーベル文学賞受賞者のナイジェリア人ウォーレ・ショインカにより 1950 年代に創設された最も古い学生結社である。元来イギリス植民地支配への抵抗を目的として結成された。現在は，先進諸国に対し外国人と住民との共生に向けてのロビー活動等を行い，ナイジェリアでは反トライバリズム運動と貧困の地域への援助等の福祉活動及び道徳意識の向上などを行う互助的学生組織である。

日本の支部をはじめとしてナイジェリア，米国，英国，オランダに支部があり，月 1 回会合を開く。会報「Hiroshima Flotilla」が年 4 回発行され，無料でナイジェリア人が経営するバーやレストランなどに配布されている。会報は，在日ナイジェリア大使のインタビュー，同郷人団体のイベント紹介，日本での仲間の出産及び結婚等の報告や日本での就労環境などのレポートが掲載されている。所属している属性は，ナイジェリア人男性に限り大学卒業者である。会員は学生時代からのメンバーで，イボ人，ヨルバ人，エド人など出身民族は全く問わない。会員のほとんどが滞在年数 10 年以上経っており自営業や会社員として生活の基盤が確立している。

これらの団体に所属している就労者は，月 1 回のミーティングをリフレッシュの場として楽しみにしている者が多い。団体によっては当番会員がナイジェリア料理を持ちよりビールを飲みながら議論に興じている。いずれの団体も母国から離れていても母国や母村との結びつきは強い。州の同郷人会から集められた寄付金は母州の施設等の建設費に利用され，母村からは個人的に多大な貢献をした者には母村より称号が授与されるケースも増えている[7]。このように在住ナイジェリア人と母国との関係性は，日本からは金銭的な貢献をし，母村はその行為に承認を与える授受関係を通じて自民族への帰属意識が確保されるという連続性がある。

2 タイプのネットワークを整理すると，ストリート型ネットワークは，「ストリート仲間」による職場密着の情報交換の場として情報の内容はよろずやとしての機能を果たしている。グループ型ネットワー

クは，在住ナイジェリア人に限定された情報交換の場であるとともに互助組織を通したアイデンティティの再生産としての機能がある。

次章では，周縁におかれたアフリカ系就労者が日本社会というフィルターを通した時に感じるずれを自己のアイデンティティと日本社会との関わりから見ていく。

7. ラベリングされた黒人像

六本木で就労しているアフリカ出身者は，5章で論じたように警察や日本人客との緊張関係を強いられることが多い。特に見た目で黒人であることが分かるので，客の好奇の対象となったり，警察の扱いが白人とは異なったり，西欧や母国で受ける扱いとは全く異なることで自己のアイデンティティの揺れを経験する。就労者の自己表出を通して彼らのアイデンティティと強者側である日本社会とのイメージとのずれを描いていく。

1. アフリカ出身である黒人

ストリートで日本人客を勧誘する際に，「どこから来たの？」と質問されることがよくある。アフリカ出身者の多くは「アメリカ」や「ジャマイカ」と返答する。彼らにとっては日常茶飯事の紋切り型の返答であり，日本人客もこの返答でそれ以上は探りを入れることはあまりない。自称アメリカ人と答えるアフリカ人は，「アフリカ出身」であることを正直に答えることで得るものはほとんどないと考えている。B氏は，「*日本人は，私たちがアメリカ出身であるとの答えを期待しているから，そうしているだけ。アフリカには興味ないでしょ。でも本当は，お客さんがどういう人が分からないからアメリカ出身といえば誰もそれ以上疑問にも思わないし，探りを入れられることもないから。身の安全が一番大事だから*」と語っている。一方で，六本木を訪れる海外の観光客から「*ニューヨークで仕事があるんだけど，どうかな？*」といった誘いや，B氏が大学でエンジニア専攻をしていたことが分かると，「*なぜここで働いているのか，信じられない!!*」と返答される。西欧諸国では，ナイジェリアからの移民も多く，彼らをビジネスパートナーとして認識しているが，六本木にやってくる日本人はアフリカ大陸に関する情報をひとつの国であるかのように一般化し，それぞれの国名として理解されることなく，画一化したイメージとしてのアフリカと認識される傾向がある。

日本人のアフリカに対するラベリングが一般化されていることを肌で感じ取っているのはP氏も同じである。日本人のアフリカ人像は「*いつも飢えていて，槍を持って野生動物を追いかけていると思っている*」と考えており，母国シエラレオネで両親と暮らしていた環境は，3階建ての家に車3台を所有し，野生動物に囲まれた暮らしとは全く無縁であった。多くのアフリカ出身者が感じているずれは，日本人が自身を基準として見たときにアフリカは遅れているという視点にあるようだ。来日しているアフリカ人男性の多くが国内や海外の大学を卒業しているエリートであり，国の生活や教育環境は，貧しくはないという事実が日本人には伝わっていないことに苛立ちを感じ，在住イボ人のビジネスマンは「*日本で放送されるアフリカはナイジェリアのラゴスのような大都市の姿ではなく，常に田舎の村ばかりである。だから，誰もビジネスの相手として関心を示さないので，ナイジェリアは撮影の規制が厳しくなっているのではないか*」と語っている。

このようにラベリングされたアフリカ出身者は，日本人客にはアフリカ出身として主張することへの無力化を伴っていく。そこで，彼らは自身の言説を西洋化したアフリカ人としてシフトさせていく。ストリートでは，仲間同士で母語やピジンイングリッシュで会話を楽しんでいても，客が通ればすかさず

日本語や英語に切り替え，自身がアフリカ出身であることを無国籍化させていく。また 90 年代から流行しているアメリカの黒人文化から生まれた音楽にヒップホップやラップがあり，日本でも若者を中心として人気があり，六本木でもこのような音楽を流すクラブやバーは多い。そこで，彼らはアフリカ出身であるが，日本人客が求めているのはアメリカ出身の黒人像であることを経験で感じていく。店先では大柄の黒人男性がドアマンをしているバーが多く，セキュリティ上の安全対策が目的であるが，他の理由として「*黒人は，いつもにこにこしてフレンドリーなイメージがあるからお客さんも来てくれる*」のであり，「*黒人はエンターテナーとしてショウビジネスでたくさん活躍しているでしょ*」というナイジェリア人男性の語りには，一般的な黒人像にアフリカ人を包摂させている。

現代を生きる彼らは，日本が作り上げたアフリカの一般化したイメージには否定的である，しかし六本木で自称アメリカ人として名乗り続けることは，日本人側のラベリングされたイメージというスティグマから彼らは主体的にアメリカ文化を借用し，アメリカ人という自称を与えていくことで双方のずれに整合性を与えようとしていることが分かる。しかしながら，自称アメリカ人を名乗る背景には，B 氏が「自身の安全のためと」述べたところに二つめの理由がある。

2. 強者による黒人の位置づけ

B 氏の口から，「*Roppongi may happen RIOT.*」（六本木で暴動が起こるかもしれない）といった不可解な言葉を耳にすることがあった。盛り場という性格上，客たちはあらゆる欲望や刺激，時には癒しを求めてやってくる。そうした欲求を満たすための時には闇のビジネスとして様々な「*Bad things*」が起こる。B 氏はこの「*Bad things*」の内容について積極的に語ることはしなかったが，違法な商売が路上で行われていることを目撃するとのことであった。このような商売に加担しているのは日本人や外国人であるが，このような人たちはほとんど野放しで警察の介入はないとのことであった。

一方で，B 氏を初めとした六本木で就労している黒人は，路上で立ち話や仕事をしていても頻繁に警察からの執拗な質問攻撃を受ける。実際に就労資格を持つナイジェリア人が信号待ちをしていると警察から外国人登録証を見せなさいと命令をされたが，横にいた白人男性には全く職務質問すらしないことに憤りを感じ，警察にその点を注意した例がある。アフリカ出身就労者は，アメリカ国籍の黒人とは異なり，日本の滞在（観光）ビザを得るのに時間とお金を費やしており，容易に再来日することができないため非正規就労者へと転じる者も少なくはない。警察は，黒人就労者の多くがアフリカ出身であり，なかには非正規就労者もいることを把握しており，六本木の黒人就労者＝アフリカ人としての図式がある。B 氏は，「*警察はすべてのブラックが不法であることを前提として接するが，実際にはホワイトもオーバーステイがかなりいるのに，警察はほとんど接触することはないことに強い怒りを覚える*」と語っている。また，不可解な出来事として 2002 年 10 月に，バー M が入居している同ビルのストリップバーのセネガル人がストリートで勤務中に警察に捕まるという事件が起きた。当時彼は勤務中であり，路上でいつものようにビラを配りながら客の呼び込みをしていた。しかしながら，突然現れた数人の警察官に逮捕令状も見せられることなく現行犯逮捕された。同ビルの勤務者の情報では警察の逮捕理由は，彼が飲酒していたとことがその理由のようだと語っていたが，拘束理由としては説得力には欠ける。逮捕されたセネガル人は正規就労資格者であり，加えて酒もタバコもやらない敬虔なイスラム教徒であった。勤務者の間では，彼は「とてもいいやつ」であり，警察が彼に話しかけてもフレンドリーに接する態度から他の就労仲間の情報を得る為のおとりとして捕まったのではないかと推測がなされた。警察官を父親に持つ B 氏は何度も繰り返して「警官は絶対に我々の友人などではない」ということを肝

に銘じて接しない限り，利用されてしまうだけであると語っていた。

権力を行使できる強者側の警察が黒人への監視を強める限り，アフリカ人と名乗ることは，百害あって一利無しであり，自身を変幻自在に擬態させていくことで，アフリカの出自を曖昧にし，緊張したせめぎあいを時間軸にて強者より優位な立場を確保していく術が磨かれていくのである。

8. む す び

1990年前後からナイジェリア人とガーナ人の来日者数が増加し始めた時期とグローバル化の概念が興隆した時期はほぼ重なっている。こうした流れに乗り来日した六本木のアフリカ系就労者が，日本の社会システムから機会を排除された関係性の中で生活をしていることは，グローバル化がもたらした結果と日本の国民国家が期待していた外国人労働者の役割としての「労働力」がバブル経済の崩壊以降，監視対象としての「人間」へと変化していくことと繋がっている。そして強者は国益の遵守を掲げることで監視による支配という一方的な論理により弱者である第3世界の外国人労働者は排除の対象にすり替わっていったと言える。

こうした状況下で，在住10年以上のアフリカ出身者は98年前後から六本木にバーやレストランの経営者となり，アフリカ出身者に雇用の機会を与えることで，周縁化されていた彼らが同胞の生活を保証していく立場へと成長をしている。また，六本木は欲望の集積地であり，多くの労働力を必要とする場として，どのような国籍や法的地位でも拾い上げてくれる無秩序性によって周縁化されているアフリカ人の就労先として，ここ7,8年は新しい就労の場へとシフトしている。

しかし，六本木のアフリカ出身の就労実態の細部を見ると，ナイジェリアのように六本木で大きな勢力を築いているところは，経営者は同国人を採用する傾向が強いため同国の就労者は有利な労働条件を確保し易い，問題となるのは在住者が少ない国の出身者は，同国者のネットワークが発達しにくいのでリスクの高い職種や転職の機会の限界に直面していく傾向がある。まさにアフリカ諸国の勢力関係が遠く離れた六本木でも同じように描かれていると言えよう。

アフリカ出身就労者は，リスクの軽減やQOL (Quality of Life) の観点からも，日本社会では地縁・血縁者等の支援者の有無は就労者の日常全般のライフチャンスに大きな影響を及ぼしていること分かる。そのため日本に何ら基盤を持たない新来者において「情報の市」であるストリートは，先輩格のアフリカ出身者から生き抜く為の知恵を授かる実践教室として極めて重要となる。

また，ナイジェリア人社会で発達している州の同郷人団体が現在6つも設立されているという事実が示すことは，1つめは日本社会が提供するサービス全般にアクセスできない周縁化されている外国人であるがゆえに，団体が心のケアから生活全般の自助機関を創出する必要があること，2つめは，冠婚葬祭等行事の中でも葬礼に関しては，母国の慣習が優先されることで日本人が対応できない部分を団体が窓口となって母国の家族とのパイプ役を務める必要があること，3つめは都市（日本に暮らす都市移民）–村落（ナイジェリアの母州や母村）の関係からは都市移民が寄付を通じて母州の発展に貢献していくことで母州の共同体への帰属意識を促し，母村からは称号の授与を通じて在住ナイジェリア人としての誇りや地位を同胞に認知させていく授受関係により双方の連続性を維持する場として機能している点は重要な発見として挙げられる。

六本木でアフリカ人を名乗らない/名乗れないことは，日本社会のアフリカ人に対するラベリングと符号する。警察は，黒人＝非正規就労者のアフリカ出身者として見なす傾向があるため，5章2節で説

明したような隙さえあれば就労者の利害を阻もうとするし，それが警察の仕事として常に強者の論理にすり替わる可能性を持っている。そのため，就労者は，生きぬく為に巧みに日本の文化を借用したり，徹底して外国人になりすましたり，警察官向けの表現方法を身体化した技巧を駆使することで緊張関係を崩していかざるを得ないのである。また，「日本人は，私達がアメリカ人であると期待しているから」というナイジェリア人就労者の言説から名乗りを通じたアイデンティティのずれを整理すると，日本人側の視点は，六本木を訪れる多くの日本人客は，黒人がアフリカ出身者であるとほとんど認識しておらず，日本人はバーの入り口で大柄の黒人を見ることで，ヒップホップやラップの黒人音楽と共に「アメリカ」を想起していくのである。一方，アフリカ人就労者の視点は，アフリカと名乗ることで日本人のアフリカ人への未開的なイメージや無関心に遭遇していくことで自己のアイデンティティを主張していくことが無力化され，自己保身として日本人客に対して無国籍的な言説が採用されていく。このような双方の視点のずれを，就労者は，アメリカ系黒人とアフリカ系黒人の「黒人」という共通性より一般化した黒人像を借用し自称アメリカ人として自己に整合性を与えていくことで，逆に客を多く呼び込み利益を生み出していく発想の転換を図るのである。

このような就労者の実践を言い換えれば，アフリカ出身就労者が自身の利益を最大限に生み出す「生活の必要」として，強者側の「支配の必要」に抗いながらも，就労者の自己表出の変幻自在な対応は，和崎が指摘したように他者の民族境界を「パッシング」(Passing) していくことを想起させる[8]。またド・セルトーの戦術の視点からは，確固たる境界がない非-場所性の性格によって，時間軸上ですきさえあれば弱者は日本人の文化を借用し，時には逆手にとりながら変幻自在に擬態化によって自分流にアレンジし，日本社会を凌駕していく就労者の飽くなき生き抜く為の創造的な実践と言えよう。

就労者の生活戦術を創造していく力の源泉と問われれば，「夢の実現」に向けた主体的な就労者を中心基点として，ストリート仲間や地縁者と血縁者，同郷人団体，そして母国（母州と母村）が同心円状に描かれていくことで，それぞれが相補完的に自助の機能を果たしている点にあると考える。そして，この相補完的な関係性からアフリカ出身者の都市の生活世界の共同体性を描くことが可能となり，周縁化された移民が生活戦術を創出していくダイナミズムをより重層的に明らかにしていくことが今後の課題となるだろう。

注

1) 伊豫谷による日本の単純労働者の受け入れ姿勢に関しては「フロント・ドア政策」として積極的に政府が容認した受け入れ姿勢ではなく，非正規就労を承知の上で外国人労働者の受け入れている状態を「バックドア政策」としている。また外国人研修生受入れのように実態は工場での単純労働に従事させられているにも拘わらず，単純労働者の受入れ政策を真っ向からではなく，「サイドドア政策」として受け入れている政策のあり方を指している［伊豫谷，1994: 153-161］。

2) ド・セルトーは，「戦術」と「戦略」の使用について明確に区別を行っている。「戦略」は，意思と権力の主体（企業，都市，学術制度など）が周囲の「環境」から身をひきはなし，独立を保った「固有のもの」として境界線を引けるような一定の場所を前提とし，敵と明確に分かっているもの（競争相手，敵方，研究の「目標」ないし「対象」）などの関係を管理できる場所を前提とした力関係の計算のことである。「戦略」は，時間に対する場所の勝利としてとらえられるが，「戦術」は，非-場所的な性格を持つがゆえに，時間に依存し，なにかうまいものがあれば「すかさず拾おう」と絶えず機会をうかがう行為であり，そまたその機会のとらえ方とする。弱者は自分の外にある力を絶えず利用し，チャンスとそのとらえ方を臨機応変のかけひきや変幻自在な擬態により計算をめぐらすことである［ド・セルトー，1987: 24-28］。

3) 松田素二は，周縁都市の弱者の能動性は，日常において創意工夫をこらしながら新たな都市文化を創造し，周

縁に生きる生活実践の反復のなかから，絶対的困難を克服する技芸 (tactics) が形成されていると考える。こうした技芸が，住民の抵抗実践の形となると見る。[松田，1999: 88]。

4) 神崎宣武によれば，「盛り場」とは飲食店，遊技場や風俗営業を中心に構成されている街区のことで，一方デパートや各種の小売店を中心に構成されている「繁華街」とは区別をする［神崎，1993: 10]。

5) 「民族」と「部族」のどちらの呼称を使用するかについては，現在において統一の議論には達してはいない。しかし，双方において，文化集団の基本単位として，成員が共通言語を使用し，共通の統合的文化を共有し，強い共属意識を持ち合わせている点は共通している。「部族」の呼称は，英国などの宗主国が植民地化政策において間接統治に便宜上「tribe」として，日本語訳では「部族」として蔑称的にラベリングされたものである。発展段階論的な議論では，歴史が進むにつれ「部族」から「民族」へと移行していくといった議論もある［富川，1971: 94-124]。ナイジェリアでは，1960 年後半に起きたイボ人を中心としたビアフラ戦争のようにナイジェリア国家，部族間のコンフリクトを断ち切り独立国家の樹立のための民族自決運動がある。著者は，ビアフラ戦争の出来事も踏まえて，ナイジェリアが英国から独立し，国民国家として近代化を目指す過程で，旧宗主国からラベリングされた「部族」の呼称からナイジェリア人が国民-国家を生きる主体という立場を積極的に採用し「民族」の呼称にすることで，近代における他民族との共生をとらえようとしている。

6) 本稿では，各々の文化集団の呼称を「民族」とするので，「〇〇族」ではなく「〇〇人」として表記している［栗本，1992]。

①イボ人 (the Igbo)

ナイジェリアでも多数派の民族であり，南東部のアビア (Abia)，アナンブラ (Anambra)，エヌグ (Enugu)，イモ (Imo) 州の地域に主に分布している。1991 年センサスでは人口が 1,100 万人となっている。言語は，ニジェール-コンゴ大語群のクワ語系に属している。イボ民族の起源については定かではないが，ニジェール川とベヌエ川が合流する北部から移住してきたと伝えられている。イボにとってのヌリオウカオルル (Nri-Awka-Orlu) 高原はイボの故郷として今でも人々の心に宿っていると言われている。

②エド人 (the Edo)

多く分布している地域は，中西部のエド (Edo) 州とデルタ (Delta) 州である。1991 年センサスによると人口は約 78 万人である。この中西部地域は 10 世紀頃に登場したベニン (Benin) 王国の統治下にあった。15 世紀にはオバ (Oba)，エワレ (Ewuare) の統率の下，堅固な統治組織が確立しており，こうした組織力は西側のヨルバ領域やイボ領域への侵攻を可能にし，また古都，現在のベニン市を中心に道路の建設や城壁を設けるなど最もベニン王国が花開いた時期である。19 世紀には英国の植民地下に置かれることとなる。ベニン市はエド州の現在の州都となっている。

③ヨルバ人 (the Yoruba)

南西部のラゴス (Lagos)，オグン (Ogun)，オヨ (Oyo)，オスン (Osun)，オンド (Ondo) そしてクワラ (Kwara) 州に渡り分布しており，ナイジェリアの多数の人口を占める民族である。ヨルバ語は約 1,800 万人以上の人々により話されているとされており，言語は，ニジェール—コンゴ大語群のクワ語系に属している。ヨルバの起源は明らかではないが，伝説によると先祖となるオドゥドゥワ (Oduduwa) が北部エジプトより移住し，7 人の子供がそれぞれのクラン (Clan) として成長しヨルバ小王国 (Yoruba Nation) を建国したのが始まりとされている。奴隷貿易時代には西洋との奴隷や武器の貿易によりイバダン (Ibadan)，アビオクタ (Abeokuta) などの町が台頭し，ヨルバ王国との戦争が起こったが英国の介入によりヨルバランドは平定され，保護下に置かれる。アフリカ諸国の中でも最も西欧化の波を受け続けていた地域である。

④ハウサ人 (the Hausa)

ナイジェリア北部に位置し，ソコト (Sokoto)，ケヴィー (Kebbi)，カノ (Kano)，ジガワ (Jigawa)，カスティナ (Kastina)，バウチ (Bauchi) そしてカドゥナ (Kaduna) 州に主に居住し，人口は約 2,500 万人である。言語はアフリカ-アジア語族チャド語派に分類される。ハウサは多くがイスラム教徒であるとともに大変商業活動が盛んであり，西アフリカの西側にまでハウサ語が商業用語として広まり，現在でもリンガフランカとしても西アフリカを縦断した共通言語となっている。[Oyewole and Lucas, 2000: 103-105, 183, 540-541]。

7) 現在，ナイジェリアのイボ社会は，1978 年に施行された首長制令に基づき王制が導入されており自律的共同体の評議会で称号授与者が決定される［松本，2003]。著者が 2005 年 6 月現在把握している在住ナイジェリア人のうち，イボ人とエド人の称号保持者は 6 名いる。プリンス (Prince)1 名，ンゼ (Nze) 1 名，チーフ (Chief) 4 名である。

8) 和崎春日は，コーエンの都市社会の生き抜き戦略として「借用」「創造」そして「修正」の段階を援用しながら，

異文化そして時には自己文化を「パッシング」しながら「借用」を行ったり，「修正」して，異文化と自己固有のエスニックバウンダリーの境界の操作により巧みに生き抜く都市の住民の戦略を論じている［和崎，1988: 79-95］。

参考文献

赤阪 賢 1988 「市の民俗—西アフリカの事例から—」『富山大学人文学部紀要』13: 55-71.

石原 潤 1987 『定期市の研究-機能と構造』名古屋大学出版会.

川田順造，福井勝義編 1988 『民族とは何か』岩波書店.

神崎宣武 1993 『盛り場の民俗史』岩波書店.

栗本英世 1992 「『部族』とアフリカ変動」『月刊アフリカ』Vol. 32, No. 2.

駒井 洋 1994 「段階的市民権を提唱する」『世界』596: 122-133.

出入国管理法令研究会 2002 『注解判例 出入国管理外国人登録 実務六法 平成 14 年版』日本加除出版株式会社.

富川盛道 1971 「1 部族社会」『地域研究講座 現代の世界 アフリカ』ダイヤモンド社.

服部銈二郎 1994 「『盛り場』人類最高の傑作」『都市問題研究』45(9): 3-18.

原口武彦 1996 『部族と国家』アジア経済研究所.

法務省入国管理局 『上陸拒否者数及び入管法違反事件概要』平成 4 年版，8 年版.

松田素二 1987 「万能の解釈道具『部族』のウソ」『アフリカ人間読本』河出書房新社.

松田素二 1996 『都市を飼い慣らす』河出書房新社.

松田素二 1999 『抵抗する都市—ナイロビ移民の世界から—』岩波書店.

松本尚之 2003 「現代イボ社会における王の誕生」『民族学研究』68 (3): 325-343.

町村敬志 2000 「グローバリゼーションのローカルな基礎」『社会学評論』50: 124-139.

宮本正興・松田素二編 2002 『現代アフリカの社会変動』人文書院.

宮本正興・松田素二編 2002 『新書アフリカ史』講談社現代新書.

望月克哉編 2000 『ナイジェリア』日本貿易振興会アジア経済研究所.

入管協会 『在留外国人統計 各年版』財団法人入管協会 昭和 60 年度～平成 14 年度版.

若林チヒロ 1994 『来日アジア・アフリカ系外国人の生活適応と日本人との共生に関する研究』来日外国人との共生社会研究会.

和崎春日 1988 「都市人類学からみた『都市の本質』—都市生活者の『生き抜き』戦略とエスニック・バウンダリー論—」『都市問題研究』40(2): 79-95.

和崎春日 1993 「VII できていた『国家』と選ぶ『民族』」飯島茂編『せめぎあう「民族」と国家 人類学的視座から』アカデミア出版.

和崎春日 1993 「現代アフリカにおける部族儀礼の政治学」『アフリカ その政治と文化』慶應通信.

Anderson, Benedict. 1983, *Imagined Communities: reflections on the origin and spread of nationalism*, London. ＝白石 隆・白石さや訳 1987 『想像の共同体-ナショナリズムの起源と流行』リブロポート.

Barth, Fredrik. 1982 [1969], *Ethnic groups and boundaries: The social organization of culture difference*, Universitetsforlaget.

Certeau, Michel de. c1984, *The practice of everyday life*. translated by Steven Rendall, University of California Press, Berkeley. ＝山田登世子訳 1987『日常的実践のポイエティーク』国文社.

Cohen, Robin. c1987, *The New Helots: migrants in the international division of labour*, Gower Pubishing. Co, Brookfield, Vermont. ＝清水知久訳 1989『労働力の国際的移動 奴隷化に抵抗する移民労働者』明石書店.

Knox, Paul L. and Taylor, Peter J. 1995, *World cities in a world-system*, Cambridge University Press, Cambridge, New York. ＝藤田直晴訳編 1997『世界都市の論理』鹿島出版会.

Oyewole, A and Lucas, J. 2000, *Historical dictionary of Nigeria 2nd ed.*, The Scarecrow Press, Inc., Lanham, Maryland.

Taylor, R. W. 1993, *Urban development in Nigeria*, Ashgate Publishing Limited, Brookfield, Vermont.